

知ってますか

技術の

あれこれ

27

フランソワ・ゾラと エミール・ゾラ親子(4)

セザンヌの魅力と描いたリンゴとゾラ・ダム



三浦 基弘

MIURA Motohiro

元大東文化大学講師

日本のリンゴ

果物が好きである。そのひとつがリンゴ。筆者が小さかった頃は、小ぶりの旭^{あさひ}というリンゴが主で、酸っぱかった。品種改良（以下改良）されてデリシャス、黄色いインドなどのリンゴもあった。因みにインドは国名ではなく、アメリカのインディアナ州で生まれた品種である。

日本一のリンゴの生産地は青森、2位が長野と続く。リンゴのルーツはコーカサス山脈。イギリスでリンゴの改良が始まり、アメリカ大陸にリンゴの木を持ち込んだのは、メイフラワー号以来のヨーロッパからの移民であった。17世紀であるからもちろん、野生種に近いクラブアップルである。これは酸っぱくて甘みが少なく、じかに食べることができず、料理用、酒用だった。単にアップルと呼ぶのは、後に改良され大型になった甘いリンゴのことをいう。

アメリカで改良されたリンゴが、明治に農産業育成の国策として日本に輸入。国内の農業試験場で接ぎ木の技術で繁殖され、全国の都道府県に配付された。古くから日本にあった林檎（漢字で書くのは日本古来のリンゴを指していた）よりおいしかったので飛ぶように売れ、広まった。「リンゴの木1本から米16俵分の収入がある」といわれ、リンゴの栽培面積が飛躍的に拡大し、明治20年代、リンゴブームが到来。しかし、苗木を輸入するときに持ち込まれた外来生物リンゴワタムシにリンゴの木が襲われた。明治が終わるころには、ほとんどの県がリンゴ栽培を放棄してしまった。

唯一残ったのが青森県。理由は養蚕ができなかったからといわれている。

日本のリンゴは、フランスのリンゴよりも粒が大きい。日本のリンゴの年間生産量は74.2万トン（世界17位）、フランスは173.7万トン（世界7位）である。因みに1位は中国で3,963.3万トン（2013年統計）。日本のリンゴの種類は、フジ、紅玉、王林、陸奥^{むつ}、金星^{きんせい}、祝^{いわい}などがあり、生産量が多いのは、フジ。フランスのリンゴの種類は、Petite sorte、Rambour franc、Pomme Royal、Reine des reinettes、Belle de boskoop、Royal galaなどである。フランス人が好んで食べているのは、ゴールドデン、ガラダそうで、数量は少ないが日本のフジも人気があるそうである。

セザンヌとリンゴ

そんなに絵画に詳しくなくても著名な画家の描く対象物を示すと、納得することがある。たとえば向日葵といえはゴッホといえるであろう。睡蓮といえはモネ、愛らしい少女、少年といえはルノワール、猫といえは藤田嗣治、富士山といえは葛飾北斎など。当たらずと言えども遠からずであろう。

筆者の友人、知人にセザンヌ（Paul Cézanne 1839-1906 写真1）の絵は、何を思い出すが聞いてみた。すると、リンゴと山が多かった。山は青年時代、エミール・ゾラ（Émile Zola 1840-1902 以下ゾラ）と遊んで近くに見上げることができたサント＝ヴィクトワール山のことである。セザンヌは人物、風景も描い